望郷・はがね野郎

新田次郎

新田

新田次郎全集 9

望郷・はがね野郎

新潮社版

望郷・はがね野郎
新田次郎全集第九巻

昭和五十年五月二十五日発行
昭和五十三年六月二十五日四刷

定価一二〇〇円

著者　新田次郎

発行者　佐藤亮一

発行所　新潮社
東京都新宿区矢来町七一〒162　振替東京四一八〇八
電話　業務部03(266)五一一一　編集部(266)五四一一

印刷　株式会社金羊社
製本　神田　加藤製本

© Jiro Nitta, 1975, Printed in Japan.
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

望郷 5
＊
豆満江 127
はがね野郎 167
海賊の子孫 193
贈賄 219
天国案内人 249
西沙島から蒸発した男 273
月下美人 301
生き残った一人 335
七人の逃亡兵 361
解題 384

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

望郷・はがね野郎

望

鄉

1

靄が立ち込めていた。

沢田冬明がその靄の存在に気がついたのはかなり夜更けてからで、その夜の景色が、いつもと違って、なにか日本の春の夢を思わせるふくらみを持っていたからである。

その現象が夜おそくなっておきたところから考えると、単なる輻射冷却によって発生したものとも思われないし、風が存在しない以上移流性のものでもなさそうだった。そうかといって、特定な地形と密接な関係を持つ、或る種の熱の移動によって起ったと考えるのも当を得ていなかった。

靄を靄として感じさせるのは、どこかに月が出ているに違いなかった。おそらく鎌のようにとがった月が、わずかばかりの光量をばらまき、それが靄の粒子に当って、曖昧な夜の世界を現出させているのだろう。沢田冬明は窓によって、外を覗いたが月は見えず、延辺地区軍司令部の建物が、黒々と見えていた。

軍司令部の建物が眼に入ると、沢田の頭にできかけていた、故郷の春の夜とのつながりはたち切られて、彼はひどくせつなそうな顔をした。

彼の居室兼仕事場は、堆く積みあげられた機械類に取りかこまれた穴ぐらだった。

彼はそこで、眠れぬ夜を送っていた。眠ろうと思えばいよいよ眠れぬ長い夜に、たとえ、靄が発生したというようなささいなことであっても、彼の気をまぎらす役には立った。

彼の窓からは延辺地区軍司令部と、隣の楊柳の並木道と、その中間に張りめぐらされた鉄条網が見えた。それだけがその窓から見えるすべてだった。沢田はこのままではとうてい眠れないだろうと思った。眠るには、それ以上のなにかを見て、それが、彼の神経を少しでも休めるものであったならば、眠れるだろうと考えた。彼は上衣をつけると外へ出た。

深夜の延辺地区軍司令部の庭は広大であったが歩き廻ることはできなかった。彼の工作室の建物について廻ると、衛兵所の門灯と、すぐその裏に、あかりを煌々とつけている無電台の窓の灯が見えた。それらの灯も、靄のなかにとけこんで、二つの光源が一つにつながるほどにぼやけて見えていた。

沢田冬明は、上衣の左腕の腕章に眼を向けた。字はあかでよごれてはいるけれど、無電技術員とかろうじて読み取れた。

沢田はその腕章がまだ真新しかった半年前の一月の厳寒期と、そして、すぐそれにつづく過去への追憶にひたった。

昭和二十年十一月、その朝は、濃い霧の朝だった。彼は、北鮮の丘の上から、家族たちと引きはなされて、ソ連軍の捕虜の数に加えられて、この延吉の町へ送られて来たのである。そして、約二カ月の捕虜生活をしてから十二月三十一日の午後突然解放された。その夜の寒さと、そして深い煙霧の中をさまよいつづけた絶望感は忘れることのできない思い出だった。数日後彼は中共軍の技術者として職を得て、彼の生命の保証のように、この腕章を貰ったのである。彼はその時、この腕章さえしていれば、もう、寒い煙霧の中をさまよう必要はないと思った。

冬の煙霧と、いま、彼の見ている靄とは性質が違ったものだった。冬の煙霧は、過冷却の水滴からでき上ったものであろうけれど、現在、司令部の部内にひろがっている靄は、水滴の微粒子であった。沢田冬明は、冬の煙霧にしろ、初夏の靄にしろ、彼にとって、北鮮の丘の上で家族と別れたときの朝霧の親類に思われてならなかった。それにこの靄の妙に停滞して動かないのが無気味に感じられた。

沢田は延吉についての気象にはうとかったが、この地に来て半年たつうちに、このアジア大陸の東北端に位置する盆地気候が、一般的にいうマンチュリヤの気候とかなり違っていることを知った。彼の足もとからは平坦な赤土の大地がひろがっていた。その大地のひろがりは、北部の老爺嶺、東部の大麗嶺、高嶺、南部の長白山嶺とその支嶺群及び西部の天定山群などによって囲繞されていた。煙霧とも、靄とも判断しにくいような現象が、時々起るのは、やはりこの地形の影響のように考えられた。

この気候的にも特殊な地域は、民族的にも特殊な地域であった。かつて、この地域は、しばしば朝鮮民族と漢民族との繋争地でもあった。間島と呼ばれていたごとく、二つの民族の中間緩衝地帯でもあった。現在その特殊な、広大な盆地を支配するものは、中共軍であることは間違いない事実であり、その統率部の位置する延辺地区軍司令部の鉄条網の中に、たったひとりの日本人が存在することもまた、きわめて特殊のことであった。

沢田冬明は自分自身を雇人と考えたかった。中共軍に技術を売る代償として、食べさせて貰っているのだとすれば、彼の自由意思によって職を辞して鉄条網の外へ出ることができるのだが、辞職が許されないところに彼の雇人の特殊性があった。

春が来るとともに日本人の間に引揚げのニュースが伝わった。そしてそれが愈々現実の形で近づいて来ると軍司令部に勤めていた日本人のことごとくは職を辞した。そしてたった一人の例外として、沢田冬明は、無電工作室にとどまって、機械修理をつづけねばならなかった。彼の不眠症の原因は町の日本人が引揚げていくのに、彼だけが取残されはしないかという不安感と、それよりも増して、北鮮に残して来た、家族の安否だった。終戦とともに満洲から北鮮へ疎開した彼の家族は、なにものも持っていなかった。丸裸同様で冬が越せたかどうかは疑問だったが、もし一冬を生きぬいたとしたら夏とともに開始される引揚げまでには家族のもとへ帰ってやらねばならないという切迫感が沢田を責めつづけていた。

沢田は、つめたい壁を背にして、もう永久に動かないように静まりかえっている靄の中に自分を投げ出していた。眼をつぶると、なにか物音がした。眼を開けると聞えない。そんなたわいもないことを、なんどとなくやっているうち、彼は眼を開けてもつぶっていても、遠くから或る規律を持った音が伝わって来ることに気がついた。耳をすますと、遠くの物音は靄にとざされた軍司令部の静寂さに食い入るように近づいていた。人の声ではなく、地を這って来る重苦しい音だった。かなり遠くの物音ではあったが、音源は単一源から発生されるものではなく、多くの音が複合されて、しかも、静かに移動しつつある音のように思われてならなかった。沢田はその音が空耳ではなく、間違いなく、なにか大きな集団が近づきつつある音であることに気がついて立上った。

衛兵所に人数が殖え、そして門が大きく開かれた。が、司令部は相変らずひっそりしていた。音は車の音だった。何十台かの牛車がのろのろと移動して来る音だった。司令部の中から軍服姿の男が数人現われて、門のところに立った。

黒々と長い牛車の列は門のところでは止らずにそのまま、広場を横切って奥の方へ移動していき、その先頭は沢田冬明の仕事場の窓の下で止った。大車は、家族群とその荷物を運んで来たものだった。大車の廻りを護衛して来た、長袖の軍服を着た若い兵士たちは、銃をそこに置いて、家族たちが、車からおりるのを手伝った。車をおりた一団は、沢田の仕事部屋から廊下をへだてて続いている講堂に入っていった。家財も運びこまれていった。やがて、その一団の全員が講堂の中にすべて姿をかくすと、からになった牛車は、前と同じようにゆっくりと重い音を立てて靄の中へ消えていった。

二百人ほどの団体だったが、まるで一家族の移動のよう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

になんらの混乱も起きずにすべては静穏のうちに終った。ほとんど誰も知らないうちに、新しい客たちは新しい家に身を横たえたようであった。

沢田は、その家族部隊が遠いところから移動して来たものであることを疑わなかった。ひとことも口を利かずに黙黙と、指示されたところへ落ちついていく家族たちは、或る意味では移動することに馴れているようにも思われた。暗くて、彼等の表情は分らなかったが、おそらく淡々とした表情で、すべて、数名の指示者のなすがままに整理されていったようだった。

静けさはかえったが、靄は前と違っていた。地面に吸いつくように離れなかった靄が徐々に動き出したのである。動くのが見えるのは、濃淡がはっきりして来たことであり、動き出した時は既に靄ではなく、霧の形に変貌しつつあった。朝が来るのだと沢田は思った。そして突然彼は、その夜明けとともに大変な不幸が自分を見舞って来るのではないかと思った。

2

靄は朝になって霧になった。この地方としては珍しいことだった。

沢田冬明は霧の中にきのうと違ったなにかが起っていることを知った。それがなにであるか具体的には分らなかったけれど、朝とともに、軍司令部の中が急に活気づいて来たことは事実だった。彼の仕事場の近くに引越して来た家族たちの声も聞えた。子供の泣き声も、それをなだめる母親の声も聞いた。なごやかな空気が、鉄条網の一角で起りつつあるのに、軍司令部の前の庭では号令をかける声が聞え、遠ざかっていく軍靴の音が聞えた。

沢田冬明はたたみの上に敷いた毛布をくるくると巻きたたむと、それを紐でしばって、上衣を着て、食堂に出かけていった。平壌の捕虜収容所で、背広服と着かえさせられたままの軍隊服だった。既に六カ月たって、袖口はほころびかかり、ひじのあたりは黒光りしていた。

沢田は霧の中に入った。さわやかな霧でなく、重苦しい感じをおぼえるのは、不眠症が続いているせいだと思った。軍司令部の庭に吹きこんだ霧は流れつづけていた。霧の中を駈足で走る足音もまた、いつもと違った朝だった。

無電台の食堂は一般兵士たちとは違って別棟になっていた。たたきの上に、椅子とテーブルが並び、テーブルの上には、おひつがわりのブリキ罐に精白高粱飯が盛ってあった。高粱飯は腹いっぱい食べてもかまわなかったが、汁は椀にいっぱいと決められていた。醤油汁の中にモヤシと大豆油が浮いているほかに、特に目あたらしいものはなか

った。彼は黙って食堂の片隅に席を取った。しばらく前までは、彼の傍に二人の日本人がいたが、二人とも、隊長の許可を得て無電台をやめていった。厳寒の危険期を中共軍の庇護下に過して春とともに、一人は長春に向って旅立ち、一人は十日ほど前、この延吉から家族とともに日本へ引揚げるためにやめていったばかりだった。

食堂の汁鍋からもうもうと立上る水蒸気と、暗い電灯の光の下で、若々しい声でしゃべっている、朝鮮語と中国語の会話は、なんとなくいつもと違っていた。沢田は黙って椅子に腰かけて、机上に置いてある飯入れを見た。白い飯だった。米飯を炊くのは、遠来の客を迎える時だけだった。沢田は食堂のふんいきがいつもと違う原因を了解した。ゆうべの靄とともに誰かがこの無電台にも来たに違いない。沢田はあたりを見廻したが、それらしい人はいなかった。無電台の隊長の呉子良は中国人、その夫人の金玉花は朝鮮人、副隊長の高立仁は朝鮮人、そして隊員十名中、七名は朝鮮人、三名は中国人であった。隊員たちはいずれもこの付近の中等学校を卒業した者で日本語も堪能だった。彼等は既に六カ月間の無電に関する教育を終えて、通信当直に立てるものばかりであった。沢田は彼等がいつになくおとなしいのは、おそらく、この食堂に間もなく現われるであろう客を待ってのことだろうと思った。

客は三人の中国人だった。二人は長袖の中国服を着て、寒くもないのに、いかにも寒そうな格好をしていた。そして一人は濃い緑色の将校服を着た背の高い男だった。腰に拳銃をさげていた。二人の長袖の中国服を着た、まだ少年らしい容貌を多分に備えた男は、あいている席を見つけて坐ったが、将校服の男は、坐らずに入口を背に突立って中を見廻していた。彼の赤色の長靴がにぶく光っていた。誰かを眼で探しているらしかった。沢田は、ひょっとすると、探している相手は自分ではないかと思った。隊長の呉子良は、無電技術を持っている者を時々つれて来た。中国人の場合も、朝鮮人の場合も、稀には沢田と同じ運命にある日本人の場合もあった。呉子良は沢田冬明という技術者をいささか買いかぶっていたようだった。呉子良はそれらの客の前で沢田の技術を実力以上に吹聴しているらしかった。そのためか、多くの場合、その会見は、沢田を前にしての口頭試問に終っていた。そのことが純粋な技術上のことならば答えられないことはなかったが、質問が訊問に変形していくので、不愉快なものをあとに残す場合が多かった。沢田はなるべくその新しい客の眼にとまらぬように下を向いていた。だが妙な静けさが、低い囁き声となって、沢田の方へよせられているなと思ったとき、

「君が沢田かね」

とその男が中国語で言った。沢田は箸と椀を机上に置いた。

「君は英語を話すのか」

第二問は英語だった。全く予期しないことだった。沢田はそれに対してどう答えていいのかしばらくは迷っていた。話しますと言えるほど話せなかった。たとえ片言を話せたとしても、話せるということがなにか災いのもとになりはしないかと、まず結果を考えてものをいう習慣ができあがっている日本人にとって、すぐ返事はできなかった。英語を話すか話さないのか、と、将校服はやや早口でまたいった。その声は前よりもやや高く、そして彼の発言は、沢田との会見を、息をひそめて眺めている無電台員たちを、充分考慮に入れてのもののように思われた。

「いくらか話せます」

と沢田は答えて、そしてすぐ、その結果がたいへんなことになりはしないかと思った。しかし彼はそれ以上なにも言わずに、きびすをかえして食堂を出ていった。息のつまるような一瞬だった。高いところから沢田を睨んでいる細い眼は、いままで、かつてないほど危険なものに見えてならなかった。

「同志、陶武亮……ゆうべ来た人です」

と沢田の隣に坐っている朝鮮人の朴雲山が教えてくれた。どこから来たのか、この無電台とどういう関係にあるかは告げなかった。沢田もそれ以上聞いてはならないことをよく心得ていた。

「彼は英語を話すんだね」

中国人の許隆生が朴雲山のとなりに坐りながらいった。

「そうだ、たいしたもんだよ」

朴雲山は、陶武亮の出ていった方を見ながら小声で許隆生にいった。そしてふたりは、日本語でたいしたもんだなどといったことに対してのいささかの責任を感じたように、顔を見合せると、もう陶武亮については今後いっさい関心を持たないぞと、眼と眼で申合せをしたような身ぶりを、同時に沢田の方へふりかえて、

「あいかわらず、眠れませんか」

と許隆生がきれいにそろった白い歯を見せていった。眠れないことをからかっているのではなく、そのつぎに、奥さんのことを思い出して眠れないだろうと冗談まじりのからかいをいうための、いつもの話しかけだった。憂鬱な顔をしている沢田の気持をほぐそうとする好意だったが、沢田は、重そうな眼瞼を上げて、許隆生の方をちらっと見て、軽くうなずいただけだった。

朴雲山と許隆生は無電台の隊員中、最も優秀な成績を持って六カ月間の無電技術学習を終っていた。無電技術学習

中に、沢田は隊長の命令によって、電気学、電子工学等を学生に教えていた。けっして先生と呼ばれることのない教師だった。教壇に立ち、黒板に向って講義をしながらも、常に自分を守ることしか意識しない日本人だった。したがって、彼の教えるオームの法則を学生たちが覚えようが覚えまいが、彼には責任のないことだった。誰かを名指して、黒板の上で問題を解かせるということもしなかった。当時は学生が三十人近くいた。そのうちの一人からでも恨みを買うことをおそれて、沢田は黒板に向って、ぶつぶつとつぶやくような講義をつづけていた。だが、学生たちは眼を輝かせて、彼の講義を聞いた。学問に対する意欲ではなく、彼等がほとんど四六時中口にしている革命のための電鍵を一日も早く握るための努力のように見受けられた。

二人はよく沢田を困らした。わざと困らせるのではなく、教えていることとは途方もなくかけはなれた、たとえば相対性原理とはなんであるかというような質問を放った。授業が終っても、沢田の工作室へやって来て、いろいろと質問した。二人は好学心の強い青年だった。

二人は既に遠距離通信の当直に立っていた。

「豚の尻尾の先を焼いて飲めばよく眠れますよ」

朴雲山がいったので許隆生が笑い出した。しかし朴雲山は、真面目な顔でほんとうなんだと力説してやめなかった。二人ははじめのうちは日本語で話していたが、そのうち、朝鮮語と日本語まじりの中国語で、その真否についての議論をつづけた。

沢田にとっては豚の尻尾どころではなかった。彼の頭の中には、陶武亮がさっきのままの姿で突立っていた。靄とともにやって来た陶武亮の眼つきは少なくとも、沢田に好意を持った眼ではなかった。沢田という個人ではなく、日本人に対する、憎悪をたくわえた眼であった。沢田はそういう眼に幾人となく会っていた。なかには憎悪を越えて、殺人に近い光を感じさせる眼もあった。陶武亮の細い眼の中にひめられている日本人に対する憎悪の評価はむずかしかったが、陶武亮がやって来たことが、沢田にとっていいことでないことだけは確かのように思われた。

3

昭和二十一年六月八日停止内戦救国和平と書かれたアーチが軍司令部の門のところに飾られた。それまで、午後になると定期便のようにやって来ていた偵察機の姿はその日から見えなくなった。中共と国府との停戦協定が成立したのである。

沢田はほっとしたと同時になにか大きなチャンスを逃したような気がした。内戦が延吉におよんでその渦中にまき

こまれることからは逃れたが、あわよくばそのどさくさにということはできなくなったのだ。

彼は憂鬱な顔をして、暗い仕事部屋に坐っていた。その一室がもともとなんであったか沢田には見当がつかなかった。ひどく暗く、妙な臭いがしていた。あの霧の夜があけて、間もなく、彼は、この部屋に移転を命ぜられたのであった。昼でも電灯をつけないと仕事ができなかった。暗い部屋のせいか、朴雲山や許隆生のほかにこの部屋に来る者とすれば、無電台の食堂の水汲みの使役を命令に来る、朝鮮人の趙化文か、新しくやって来て無電台の副隊長の位置についた陶武亮だった。

陶武亮が沢田の仕事部屋に来るときは中国語を使った。沢田の経歴を尋ねたり、冬明という名前について説明を求めたりした。冬明という名は彼の祖父がつけた名前であった。冬を明るくするような人になれという祖父の意志が冬明という名になった。ふゆあきと呼ぶものはまれで、たいていの人はとうめいと呼んだ。

陶武亮は沢田の姓名の由来についてほとんど関心を示さなかった。一週間ほど置いて同じことをまた沢田に訊ねたのは、姓名に興味を持っているのでも、訊ねたことを忘れたのでもなく、要するに、どうでもいいことを、手当り次第質問しているとしか考えられなかった。

沢田は、三度、彼の姓名の意味について、訊ねられたとき、日本では冬明は透明と同じ発音であると答えた。陶武亮は、なにか虚を衝かれたような顔をして沢田が紙に並べて書いた字と、沢田の顔を、見くらべていた。それ以後、沢田の姓名について訊ねることはしなかった。

陶武亮は一日に何回となく工作室へやって来た。それも、不意に現われるといったかたちであった。彼は妙に静かな歩き方をする男だった。すいすいと、床をすべるように、まるで、ホテルのボーイが廊下を歩くような、静粛でしかも速い歩き方だった。足音をしのばせて来るのではなく、その歩き方が彼自身の持前のもののようだった。

沢田は、無電台の食堂で、朝鮮人たちが、陶武亮は、終戦まで、ホンコンのホテルのボーイをやっていたと噂をしているのを小耳にはさんだ。それが真実であってもなくても、陶武亮の歩き方に関する限りは、彼の赤い長靴の裏に油でも塗ってあるかのように滑らかであった。

陶武亮はしのびよるように、工作室へやって来ると、その部屋に積んである、使いものにならないラジオのがらくたに手をかけて、根気よくひっくりかえしていた。沢田が保管を依頼されている、真空管の数を調べることもあった。そんなことをしている時の彼の眼は、ひどく真剣だった。

時によると彼は、本の一頁をひきちぎったような電気配

線図を持って来たり、数式を書いたものを持って来て沢田に説明を求めた。説明できるものより、説明しかねるものの方が多かった。それはすべて断片的なものだった。沢田が説明に窮すると、陶武亮は満足気な笑いを漏らしていた。高圧的なもののいい方だった。速い中国語をべらべらしゃべった。沢田が分る分らないは別のことのようにしゃべるだけしゃべると、引きあげていった。

その陶武亮も食堂では全く違った態度を示した。多くの人の前では、おどろくほど、悠々とした物腰態度で、沢田に対しても、あるていどの対等意識を現わした笑顔を示しながら、英語で話しかけて来るのである。正確な英語ではなかった。少なくとも、英語についての高等教育を受けたとは思われなかったが、分りやすい英語だった。実際に、役に立っていた英語であった。

陶武亮はしゃべり出すと調子に乗って、いつまでもやめなかった。沢田が困れば、困るほど、あびせかけるように、早口の英語の弾丸は飛んだ。陶武亮の話しかけは沢田冬明との英語会話能力の差を人前にさらけ出して見せる意図のようにさえ思われることがあった。陶武亮が無電台の食堂に現われると、居合せた者はいっせいに沈黙した。陶武亮とともに靄の夜にやって来た、長袖を着た中国人は、半月もたつと無電台員たちとすっかり親しくなったが、陶武亮が無電台員たちと話しているのを見たことはなかった。彼が当直に立っているという話は聞かなかった。しかし彼が技術者でない証拠もなかった。陶武亮のことを尋ねても、誰も答えてはくれなかったが、彼に好感を持っている者はいなかった。

「彼はいったいなにものなんです、なにをしに無電台に来たのでしょう」

沢田はぶらりと仕事場に遊びに来た中国人の許隆生に聞いた。

「彼のことは私たちもよく知らない。ただ、沢田さん、彼とは別に、あなたは、いまがたいへん大事なときだということをよく考えて下さい」

大事なときってなんですと聞いても、許隆生は口を固く結んで答えなかった。許隆生は、沢田が北鮮に残した家族のことを心配していることをよく知っていた。沢田は彼に日本に帰るまでの仮の宿として、職を中共軍に求めているのだと、はっきり言ったことがあった。沢田の家族に関してたいへん大事なときだと彼がいったのではない。許隆生が、彼とは別に、と言ったことを裏をかえすと、陶武亮が来たことが、沢田にとって大事なことなのだ、今が大事といった今はおそらく内戦の推移に触れていったものと思われた。中国は内戦を停止しているが、それは全面和平でな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.